



紙袋と霧雨



薫風さつき

その紙袋には 大事なものが入っている
気を付けて持って帰らないと 外は霧雨
少し冷えるが 大した事は無い
傘を差すまでも無い

気付くと紙袋は湿っていた 中身は大事な物 重い物
いつ耐えられなくなるのだろう いつかは破れてしまうだろう

誰かが降らせる小さな雨粒 「気にならない」と浴びてきた
体は既に冷え切って こんなにも脆くなっていた
気付いて初めて怖くなった

大事な紙袋のその中身を棄てないと 進めなくなったらしい
時々 悲鳴をあげている 袋が 棄てられていく中身が
棄てる物を選ぶその眼は ひたすら黒を映していた
そこから震える左手が 何かを掴んでは棄てていった

もう棄てる物は無いか 袋の中を覗き込んだ
雨に滲んだその眼は ずぶ濡れの靴を映していた

もう棄てる物は無いようだ 靴も何も見当たらない
ところがどうだ 体が重くて歩けない

ずっと抱えていたこれを どうとう放り投げる事にした
音も立てずに落ちたそれは 冷たい雨に溶けていった

雲が晴れて 日が差した
溶けたそれは干涸びて 人に踏まれて 目を覚ました
これ以上は無いという 軽い足取りで消えていった